

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

グラディエーターII 英雄を呼ぶ声

2024年/イギリス・アメリカ映画

配給：パラマウント・ピクチャーズ、東和ピクチャーズ/150分

2024 (令和6) 年 11 月 16 日鑑賞

T・ジョイ梅田

Data

2024-77

監督：リドリー・スコット

脚本：デヴィッド・スカルパ

製作：リドリー・スコット/ダグラ
ス・ウィック/ルーシー・フ
イッシャー

出演：ポール・メスカル/ペドロ・
パスカル/コニー・ニールセ
ン/デンゼル・ワシントン/
ジョセフ・クイン/フレッ
ド・ヘッキンジャー

👁️👁️ みどころ

リドリー・スコット監督が、ラッセル・クロウ VS ホアキン・フェニックスと組み、アカデミー賞5部門を受賞した名作『グラディエーター』(00年)から24年。90歳を越えた同監督がそのパートIIを完成させたからすごい。

もっとも、ストーリー展開の面白さと大迫力シーンの連続はさすがだが、奴隷商人役のデンゼル・ワシントンが主演のポール・メスカルを喰っている、との批評も多いから、本作の評価は難しい。

BC44年にシーザーが暗殺された後、ローマは共和制から皇帝制に移行したが、カラカラ×ゲタの双子バカ皇帝が統治する時代に見る、コロシウムとグラディエーターの役割は？両作を通じて登場するキーウーマンの美しさと役割にも注目しながら、グラディエーターとして奴隷から英雄へのし上がり、ついには圧倒的な民衆の支持を得ていく主人公の生きざまに拍手！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■あの名作のパートIIを、同じ監督が24年ぶりに！■□■

リドリー・スコット監督の『グラディエーター』(00年)は第73回アカデミー賞の作品賞、主演男優賞(ラッセル・クロウ)等5部門を受賞した名作だ。グラディエーター(剣闘士)という、ローマ帝国時代特有の言葉を一躍有名にさせたのが、マキシマス役を演じた俳優ラッセル・クロウなら、狂気の皇帝ルキウス・アウレリウス・コモドゥス役を見事に演じたのがホアキン・フェニックスだ。どちらが主演男優賞を受賞しても不思議ではないほどの名優同士のぶつかり合いは実に素晴らしいものだった。

リドリー・スコット監督はその後も次々と作品を発表したが、私は次の通り、そのほとんどを鑑賞し、評論を書き、高評価をしている。それは何よりも私はリドリー・スコット監督作品が大好きだからだ。

- ①『ブラックホーク・ダウン』(01年)『シネマ2』228頁
- ②『キングダム・オブ・ヘブン』(05年)『シネマ7』34頁
- ③『プロヴァンスの贈りもの』(06年)『シネマ15』206頁
- ④『アメリカン・ギャングスター』(07年)『シネマ18』14頁
- ⑤『ロビン・フッド』(10年)『シネマ25』17頁
- ⑥『プロメテウス』(12年)『シネマ29』230頁
- ⑦『悪の法則』(13年)『シネマ32』260頁
- ⑧『エクソダス：神と王』(14年)『シネマ35』301頁
- ⑨『オデッセイ』(15年)『シネマ37』34頁
- ⑩『エイリアン：コヴェナント』(17年)『シネマ』未掲載
- ⑪『ゲティ家の身代金』(17年)『シネマ42』172頁
- ⑫『最後の決闘裁判』(21年)『シネマ50』117頁
- ⑬『ハウス・オブ・グッチ』(21年)『シネマ50』41頁
- ⑭『ナポレオン』(23年)『シネマ55』47頁
- ⑮『テルマ&ルイズ4K』(91年)『シネマ55』299頁

■□■パートⅡの主人公は？将軍は？ローマ皇帝は？■□■

本作の主人公は、第1作でラッセル・クロウが演じたマキシマス将軍の息子ルシアス・ヴェルス(ポール・メスカル)。もちろん、冒頭から中盤にかけては、それは隠されたまま。本作は、ローマ帝国の将軍マルクス・アカシウス(ペドロ・パスカル)が北アフリカのヌミディアを攻めるシーケンズから始まる。

ヌミディアは架空の国だが、そんな小国がローマ帝国に抵抗して勝てるの？それがわからないまま、ルシアスとその妻アリサットが、「俺たちは必ず勝つ！」と戦いに臨む姿は勇ましい。しかし圧倒的な軍船内にあふれかえるように乗せられた大量のローマ兵が次々と上陸し、質量ともに圧倒的な武器で一気に城を攻め立てると、ルシアスたちの期待に反して城は一気に崩壊。アリサットは戦いの中で死亡し、生き残ったルシアスはローマ軍の捕虜とされてしまうことに。

『ベン・ハー』(59年)では、チャールトン・ヘストン扮する主人公ジュダ・ベン・ハーが親友のメッサラ暗殺容疑のため、ガレー船の奴隷として漕ぎ手に身を落としながらも見事な復活を遂げたが、ローマ帝国の奴隷とされたルシアスは体力優秀のため、どうやらグラディエーター(剣闘士)にされるらしい。しかし、グラディエーターになれば死を懸けた闘いに明け暮れるのだから、命が長くないのは当然だ。ところが、ローマに送られる旅の途中、ルシアスは、奴隷商人ながら元老院の有力者や皇帝とも深いパイプを持つ成り上がりの男マクリヌス(デンゼル・ワシントン)の目に留まり、さまざまな場面でその実力を試される機会に恵まれたからラッキー。かどうかは別として、マクリヌスがルシアスを成長株と見込んだのは、妻子を殺され、国を滅亡された恨みをルシアスがすべてアカシ

ウス将軍に向け、アカシウス将軍を殺すという目的のためだけに目をギラつかせながら生きていたことを知ったためだ。さあ、ローマに連行されたルシアスは古代ローマ帝国が誇るコロセウム（闘闘場）の中で、どんなグラディエーターとして成長していくの？

■□■時のローマ皇帝は？凱旋将軍への処遇は？■□■

ローマ帝国の物語は中国の「始皇帝モノ」や「三国志モノ」と同じく、メチャ面白い。ローマ帝国の歴史研究についての最大の労作は、18世紀のイギリスの歴史家エドワード・ギボンが書いた『ローマ帝国衰亡史』。また、日本における最大の労作は、女性作家・塩野七生が1992年から年1冊のペースで執筆し、2006年に第15巻で完成させた『ローマ人の物語』だが、映画でも面白い大作が多い。その代表が『クレオパトラ』（63年）だ。

レックス・ハリソンがシーザー役を、リチャード・バートンがアントニー役を、エリザベス・テイラーがクレオパトラ役を演じた同作は、史実通りBC44年にシーザーが暗殺された後、シーザーの養子であるオクタビヌスと対立した将軍アントニウスが、エジプトの女王クレオパトラと結びついたものの、結局オクタビヌスに敗れてしまう物語だが、そのスケール感は何とすごかった。とりわけ、クライマックスに見る「アクティウムの海戦」の演出は見応え充分だった。

またオールコットの原作を映画化した心温まる『若草物語』（49年）で四女エイミー役を演じ、さらには『ジャイアンツ』（56年）でジェームス・ディーンと共演して可憐な姿を見せた若き日のエリザベス・テイラーなればこそ、同作に見る“絶世の美女クレオパトラ”はまさにハマリ役だった。これなら、シーザーがクレオパトラに溺れたのが当然なら、シーザー亡き後のアウグストゥスも、ローマ帝国を捨ててまでエジプトのクレオパトラに溺れてしまったのも頷けるという絶好のキャスティングだった。

それはともかく、同作で描かれたシーザーの時代のローマは元老院が支配する共和制（民主制）のローマだったが、オクタビヌスがアウグストゥスとして初代のローマ皇帝に就任した後は、なぜ共和制のローマからローマ帝国に移行してしまったの？さらに五代皇帝として悪名高きネロや、本作で双子の兄弟皇帝として登場するカラカラ（兄）とゲタ（弟）の共同皇帝はなぜ生まれたの？もっとも史実としてはカラカラとゲタは双子ではなく3歳違いの兄弟だが、父親を含む3名で共同皇帝として統治をしていた時から、カラカラもゲタも悪政で有名だったらしい。そのことは本作でもしっかり描かれているが、アフリカの属州ヌミディアを征服したことによってローマ帝国の領土を最大に広げることに成功して凱旋帰国したアカシウス将軍は、このカラカラ×ゲタの双子皇帝からどんなご褒美をいただけるの？

■□■この将軍はメチャ善人！美人妻の出自は？その役割は？■□■

本作はルシアスがグラディエーターとして数回の勝負を続ける中で、彼が愛妻アリサットを殺された恨みを一心に向けるアカシウス将軍が実は善人だということが見えてくる。そればかりか、凱旋帰国後、アカシウス将軍が「戦いに疲れたので引退し、妻のルッシラ

と共に余生を静かに送りたい」と願い出るも双子皇帝はそれをあっさり拒否。そればかりか、今度はペルシャ方面への遠征を命じられたから、やれやれだ。そんなストーリー展開の中で、実は彼は双子バカ皇帝の圧政に嫌気がさしていたことがわかるとともに、後半からはその気持ちが明確な謀反計画に発展していくので、それに注目！

他方、本作のキーウーマンになるのは冒頭に登場したルシアスの妻アリスットではなくアカシウス将軍の妻ルッシラだ。前作ではラッセル・クロウ演じるマキシマス将軍が皇帝マルクス・アウレリアスから王位を譲られようとしたところ、それに嫉妬したホアキン・フェニックス演じるアウレリウス皇帝の実子コモドゥスが父親もマキシマスの妻も殺害し、捕らわれたマキシマスがグラディエーターにさせる物語が導入部だった。そんなコモドゥスにはルッシラという姉がいたが、本作ではそのルッシラがなんとアカシウス将軍の妻として登場する。彼女が本作でキーウーマンになるのは、コロシウムでグラディエーターとして戦い続けるルシアスの姿を見たルッシラが、ルシアスは自分とマキシマスとの間に生まれた子供であると確信し、それをルシアスに打ち明けるためだ。前作では少年として登場していたルシアスが、本作ではたくましいグラディエーターに成長しているのだから、本来ルッシラはもっと老けていなければならないが、そこは映画のことで、ルッシラはなお美しい姿のままで登場し、アカシウス将軍の妻役とルシウスの母親役の2つをそつなくこなしていくので、その演技力とその役割に注目。

■□■ 奴隷商人の濃いキャラに注目！この男が一番の悪人！？ ■□■

私は黒人俳優デンゼル・ワシントンを『マルコムX』(92年)ではじめて知ったが、その演技力の素晴らしさに仰天した。私の中高生時代の黒人俳優の代表はシドニー・ポアチエ。中学3年生の時に観た『いつも心に太陽を』(67年)に感動した私は、

なげなしの小遣いをはたいてレコードを購入し、英語の歌詞をメモして覚えたものだ。デンゼル・ワシントンの作品はその後、『トレーニングデイ』(01年)、『シネマ1』(14頁)、『ペリカン文書』(93年)、『戦火の勇氣』(96年)、『マーシャル・ロー』(00年)、『ジョンQー最後の決断ー』(02年)、『シネマ2』(137頁)、『ザ・ウォーカー』(10年)、『シネマ24』(76頁)、『マグニフィセント・セブン』(16年)、『シネマ39』(296頁)等を観ているが、そんな名優が70歳になった今、本作で主役のポール・メスカル以上に目立つ大活躍をしている(?)のでそれに注目！

『ベン・ハー』(59年)では、ガレー船の奴隷から解放された主人公が、中盤にアラブの大富豪から戦車競走用の馬を扱う技術の高さを見込まれて、宿敵・メッサラとの戦時対決に挑んでいくストーリーが描かれていたが、本作でもルシアスが、時の権力(=皇帝)と巧みに結びついて十分な財力を築き、ローマ市民や皇帝にグラディエーターの戦いを提供することによってさらなる財力と権力を手に入れようとしている、“謎の奴隷商人”マクリヌス(デンゼル・ワシントン)に見込まれることがすべてのストーリーの出発点になる。本作が2024年10月の東京国際映画祭で初披露されたのに合わせて来日した彼は、記者会

見の席で入念な役作りに励んだことの他、「90歳まで生きるとしたら、人生は3等分出来る。最初の30年は学び、次はそれを生かして稼ぐ時間で、60歳から90歳で大事になるのは『リターン』。表舞台に立つというより、どうやって世の中に恩返ししていくかを意識するようになったんだ」と述べているが、本作の演技から、70歳になった名優デンゼル・ワシントンのそんな心意気をしっかり感じ取りたい。

アカシウス將軍の謀反の企みを察知したマクリヌスは、これを双子皇帝に密告したばかりではなく、その混乱の中で双子皇帝を離間させて、カラカラ帝にゲタ帝を殺させた上、カラカラ帝のためにコロシウムでのグラディエーター大会を開催したが、その規模は？そしてそれに臨む彼の思惑は？リドリー・スコット監督の超大作たる本作の評論が多いのは当然だが、そのほとんどは、本来チョイ役であるはずのマクリヌスが主役のルシアスを「喰ってしまっている」、「その存在感と演技力が圧倒的すぎる」と評価しているが、さてあなたの評価は？

■□■コロシウムをプールに！水中にサメ！水上には軍船が！■□■

ボクシングでもレスリングでもそして柔道でも、対等な条件で試合をするためには男女別はもとより、体重別とされている。その例外は日本の国技たる大相撲だが、ローマ時代のコロシウムでは、グラデーター vs 猛獣という異種格闘技があるので、それに注目！ちなみに1976年のアントニオ猪木キ vs モハメド・アリの異種格闘技戦はあまりにも細かすぎるルールのため「世紀の凡戦」に終わってしまったが、本作のルシアスは猛獣対決でも勝利するし、戦車のようなサイに乗った巨漢男との対決でも勝利するので、その異種格闘技戦での戦いぶりをたっぷり楽しみたい。

その極めつけは本作ラストに登場する、何とコロシウムをプール状態にした上、水中にサメを泳がせ、水上には軍船を浮かべた上、アカシウスをリーダーとする軍船とローマ軍船を対決させるものだから、この一大スペクタクルは必見！ローマ帝国時代の建築を代表するコロシウムがどの程度大きかったのか小さかったのかは知らないが、あの時代に本当にそんなことが可能だったの？もっとも、本作のクライマックスを鑑賞するについてはそんな心配はせず、ただただ無邪気にその大迫力を楽しみたい。

2024（令和6）年11月28日記